

# 野外教育としての海岸清掃活動の試み

— 「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦2001」 —

A study on Clean Beach Activities as Outdoor Education  
— “The 2001 Student Clean Beach Activities in Ishikawa” —

池田 幸應  
Yukio Ikeda

## 〈目 次〉

1. はじめに
2. 青少年と今日の社会状況
  - 2.1. 青少年と野外教育
  - 2.2. ボランティア活動について
3. 海岸愛護運動「クリーン・ビーチいしかわ」
4. 「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦2001」
  - 4.1. 活動開催の経緯
  - 4.2. 活動の概要
  - 4.3. 活動参加者の調査より
  - 4.4. 活動参加者の声
5. 今後の活動継続への期待
6. まとめ

キーワード：野外教育，海岸清掃活動，学生，ボランティア

## 1. はじめに

我が国は、その四方を海で囲まれ、人々も古くから海の恩恵を与り海を利用し、そして親しんできた。石川県は、その大部分が海と隣接したおよそ600kmの海岸線を持ち、特に県民と海とは密接な関係であり続けている。

今日、環境問題の視点から自然に対する人々の意識が高まっており、環境対策として行政側だけではなく民間企業、そして一般市民においても、日々自然環境保全活動が行われている。自分たちが住んでいる地域等の生活環境をより改善するためには、まずその地域の身近な自然環境について実際に目で見て実感し、その問題点や方法について検討し、そして積極的にその保全に努力して行かなければならない。

社会状況を考えても、核家族化、少子化・高齢化がより一層進み、加えて日常生活において情報化等により子どもたちのみならず大人たちの生活も変化している。本来、子どもたちの教育にとって多種多様な生活体験・自然体験を通じてバランス良く発達させることが重要であり、特に学校における今後の教育の在り方として、ゆとりの中で子ど

もたちに「生きる力」を育むことを基本とし、学校・家庭・地域社会が相互に連携して子どもたちを生活体験や自然体験を通じて育成することが1999年6月、生涯学習審議会より提言された<sup>(1), (2)</sup>。

「生きる力」は、子どもたちにとって勿論、次世代を担うべき学生等の若者たちにとっても不可欠なものであり、そのためには地域社会における活動の場を提供できる環境づくりが必要であり、体験活動を支援する体制をつくることが重要である<sup>(3)</sup>。

これまでも環境教育についての研究に加え、野外教育に関して、活動に参加した子どもたちへの影響や、指導者に関する研究などについてもなされている。1997年10月、日本野外教育学会が発足し、今後のこの分野での研究の必要性が指摘されている。

本研究では、石川県において海岸愛護運動の一環として行われて来た「クリーン・ビーチいしかわ」の活動の中で、今回、初めて実施された「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦2001」の試みについて、その実態を報告し野外教育的知見から考察を若干加える。

## 2. 青少年と今日の社会状況

### 2.1. 青少年と野外教育

現代社会においては核家族化がより一層進み、これに伴い出生率が低下し子ども達の数も減少している。我が国の65歳以上の高齢者人口は、2286万9千人（2001年10月1日現在、国勢調査抽出速報集計結果）と総人口の18.0%を占め、2020年には3,333万5千人（総人口の26.9%）（国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口・1997年1月推計」）に達し、急速な高齢化社会が到来すると予想されている。また、出生数は1975年以降毎年減少し続けていたが、平成3年からは増加と減少を繰り返しており、2001年では117万665人、合計特殊出生率は1.33（厚生省人口動態統計年報）となっており、少子化が進行している。このように、合計特殊出生率は、現在の人口を将来においても維持するのに必要な水準（人口置換水準）である2.08を大きく下回っており、この傾向が続けば、我が国の人口は減少に転じていくこととなる<sup>(4)</sup>。

これに加えて、マスメディア等の発達により日常生活において情報化が浸透し、人々の生活も変化して来ている。現在の青少年は、その幼児期から溢れる玩具やテレビ、ファミコンなどを使って独り、または少人数で室内において過ごす傾向が見られ、加えて自然環境の変化や環境破壊等により自然の中における様々な生活体験や自然体験などに接する機会も不足している。青少年が積極的に自ら学びそして考えて実践して行く「生きる力」を育むためには、仲間と共に自然の中での体験活動のより多くの機会に触れてゆくことが大切である。青少年にとっての野外教育は感動する心や自主性、忍耐力、判断力、協調性、責任感など様々な資質を養うことが期待でき、青少年の人間としての成長にとって大きな役割を担っていると言える。

人は、自然の中で多くの様々なことを学ぶ<sup>(5)・(6)</sup>。自然体験活動を通じて、驚きや感動を体験し、豊かな感性を育む。また、自然や環境について知り、それを大事にする心が養われたり、忍耐することの大切さを学んだりする。さらには地域社会や国土への愛着を持つことにつながる。文部省中央教育審議会答申（1998年10月発行『文部時報』）においても「生きる力」の核となる豊かな人間性として、①美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性、②正義感や公正さを重んじる心、③生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観、④他人を思いやる心や社会貢献の精神、⑤自立心、自己抑制力、責任感、⑥他者との共生や異質なものへの寛容をあげ、「自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考える力、正義感や倫理観等の豊かな人間性、健康や体力」が「生きる力」であると示している<sup>(7)</sup>。

「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」（平成

10年度、文部省、小・中学生約1万1千人を対象）の結果においても、「生活体験・自然体験」が豊かな子どもたちほど、「道徳観・正義感」が身につけているということが明らかになった。青少年を、単に自然環境に触れさせるだけではなく教育的側面を常に配慮して機会を与えていかなければならない。現代そしてこれからの社会において、青少年に「生きる力」を養うために、自然環境の中で教育を目的とした様々な体験活動が効果的であり、体験の機会を意図的・計画的に提供して行くために、家庭・学校・地域社会・行政がより一層連携して環境づくりを促進しなければならない。「青少年の野外教育の充実について」（1996年7月、文部省報告）等において、野外教育に期待される効果として、①感性や知的好奇心を育む、②自然の理解を深める、③創造性や向上心、物を大切に作る心を育てる、④生きぬくための力を育てる、⑤自主性や協調性、社会性を育てる、⑥直接体験から学ぶ、⑦自己を発見し、余暇活動の楽しみ方を学ぶ、⑧心身をリフレッシュし、健康・体力を維持増進することがあげられており、また橋は、青少年に及ぼす野外活動効果の分類として、①親和・協調性、②出会い、③自立・自発性、④自己拡大、⑤自己客観視、⑥自然認識・自然への関心、⑦都会生活の便利さの認識を示している<sup>(8)</sup>。

少子化、核家族化、都市化そして情報化等により、子どもたちは、独りもしくは少人数でテレビゲームなどの室内遊びが中心となったり、塾や習いごとなどでゆとりがなくなっている。このように子どもたちの教育にとって、①子ども同士の切磋琢磨の機会が減少する、②親と子どもに対する過保護・過干渉を招きやすくする、③子育てについての経験や知恵の伝承・共有が困難になる、④学校や地域において一定規模の集団を前提とした教育活動やその他の活動（学校行事や部活動、地域における伝統行事等）が成立しにくくなる、⑤良い意味での競争心が希薄になるといった影響が及ぼされてきている。

また、現在の子どもの親の世代は物質的に豊かな時代に生まれ、価値観が多様化する中で、それまでと比べ確固とした倫理観を持っていない傾向があるという指摘もある。「自分の子どもさえ良ければよい」という自己中心的な考えに基づいて子どもを教育するという傾向が見られ、他者に対して積極的に働きかけ、他者のために尽くすという人間本来の社会的側面が軽視されている。さらに、最近の子どもたちは、ゲームやテレビ等の普及により、どろんこ遊びや自然の中で駆け回ることなど年齢に応じた遊びを十分に経験しておらず、このことが子どもの想像力の不足や情緒の欠落につながっていると指摘されている。また、家庭においても、子どもに習い事や受験勉強ばかりさせて家事を手伝わせることが少ないなど、家族の一員とし

での役割、責任を必ずしも教えていないといった傾向が見られ、今後これらの傾向は益々多様化し強まっていくことが予想される<sup>(9)</sup>。こうした状況に対して、青少年が少しでも多く自然環境の中で野外活動・ボランティア活動等に接する機会を増やし、学校・家庭・地域社会でネットワークをつくり上げてゆく必要がある。

## 2.2. ボランティア活動について

我が国では、1995年1月の「阪神・淡路大震災」そして1997年1月に起きた「ロシア船籍ナホトカ号日本海タンカー重油流出事故」等を契機に人々の中にボランティア意識が浸透し定着してきている。ボランティア活動に参加する人々が増加するに連れて、参加者も子どもから高齢者に至るまで多様化している。さらには、従来のボランティア活動＝慈善活動や社会福祉というイメージが非常に強かったが、現在ではその活動も様々な分野へと広がってきている。また、国際連合が2001年を「ボランティア国際年」に指定し、国際的にもボランティア活動への認識が高まってきた。我が国における1998年度のボランティアグループ数は、約8万3,000、活動者総数、約620万人にも上る。そのうち8割が女性であり、特に40～60歳代の主婦が活動の中心となっている<sup>(10)</sup>、<sup>(11)</sup>。

「ボランティア (volunteer)」という言葉は、広辞苑によれば「志願者。奉仕者。自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」とある。しかし最近「有償ボランティア」という言葉も使われ始めているように、活動に要した実費や交通費、更には多少の謝礼を得る活動もボランティア活動と捉える見方もある<sup>(12)</sup>。従来、ボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、その知識・技能や時間等を積極的に提供し、社会に貢献することであり、①自発性(自分自身の責任で、他の人から言われて行うのではなく自分から進んで行う。)、②無償性(金銭や物品や名誉等を手に入れるために行うのではない。)、③公共性(自分や特定の人のためではなく、社会・公共のために行う。)を基本理念とする考え方が一般的である。ボランティア活動を「慈善や奉仕、相互扶助の心に支えられて、他人や社会に貢献する自主的な活動」(1993年7月、中央福祉審議会地域福祉専門分科会)と捉えることが出来る<sup>(13)</sup>、<sup>(14)</sup>。

これまで人々にとって、ボランティア活動は、義務的あるいは営利的な活動とは非常にかけ離れた位置づけであったように考えられる。しかし、2002年7月29日、中央教育審議会は、奉仕活動を小中高校の教育計画に位置づけて参加を事実上義務化した上で、高校、大学で単位として認定したり、入試や就職の際に評価したりするなどの推進策を文部科学相に答申した。答申の中で、奉仕活動を「対価を目的とせず、自分を含め地域や社会のために役立つ活動

と定義し、学校での奉仕活動は「教育計画に位置づけて実施する必要がある」と明記しており、授業や課外活動の一環として、事実上全員参加の方向性を示した。また、18歳以上の学生には、ボランティア休学制度をつくらせたり、就職の際に企業や国、自治体などが、その活動実績を重視することを求めており、社会人に対しても、パスポート制度や個人・団体の表彰制度の創設を提案した。

この答申においては、奉仕活動とボランティア活動との区別について「厳密な定義に拘泥する意義は乏しい」と明確化せず、自然体験や社会体験についても、奉仕活動と同列に扱っている。

これに対し奉仕活動とボランティア活動との区別や奉仕活動の範囲など、様々な現場での混乱が予想される。

過去、そして現在、様々な分野において様々な人々が奉仕活動或いはボランティア活動を行っており、上記の問題に対して議論がなされはじめてきている。

## 3. 海岸愛護運動「クリーン・ビーチいしかわ」

石川の海岸線をきれいにする海岸愛護運動「クリーン・ビーチいしかわ」は、身近な環境対応策として1995年から海に面した石川県内の8市17町でスタートし、翌年より41市町村参加の県民運動として展開され、8年目を迎えている。エフエム石川が開局5周年記念キャンペーンとして提唱し、関係機関・団体とともに1995年1月17日(阪神・淡路大震災の日)に実行委員会を設立した。翌年の1996年からは自然生態系を構成する山一川一海をつなぐ全県一斉の運動が必要である、との声に推されて41市町村参加の県民運動になり、現在に至っている。この活動には、毎年10万人以上が参加しており、その名前は石川県民のみならず全国へと発信されている。今や石川県民は「海岸清掃活動」と言えば「クリーン・ビーチいしかわ」の活動を思い浮かべるに至っていると言っても過言ではない。

「クリーン・ビーチいしかわ」はその活動目標として、①美しい石川の渚を取り戻し、白砂青松を蘇らせる基盤づくり②野鳥や海の生き物を残酷な被害から守る海の環境・ルールづくり③沿岸漁業資源の回復に良好な豊かな海づくり等を掲げている。その活動は、単なる海岸清掃活動だけに留まらず、2000年度の海岸清掃活動では1999年度に中断した県内統一デーを海のシーズンの幕開けである5月の最終日曜と決定し復活させて恒例化し、積極的に全県挙げて海岸清掃に取り組んでいる。加えて石川県内をはじめ東京、神奈川、京都などにおいても「海からのメッセージに耳を傾けよう」をテーマに海岸に打ち上げられた様々な漂流物を種類別、統計的に展示し、多くの人たちに「海は人間のゴミ箱ではない。もうこれ以上、汚してはいけない」と共感を与えた。また、海岸林観察会の開催や海岸清掃活動の

清掃効率化調査等も実施し、『海辺のごみの回収マニュアル』を発行している<sup>(15)・(16)</sup>。

#### 4. 「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦2001」

##### 4.1. 活動開催の経緯

前項でも述べたように、石川県内の海岸環境、特にごみの実態等については、敷田（本活動のアドバイザー、金沢工業大学教授）らにより研究がなされ、加えてクリーン・ビーチいしかわの社会的意味についても、「クリーン・ビーチいしかわ1999活動報告」の中で提示されている<sup>(17)</sup>。この中で、活動への参加者の傾向として、「参加者は40～50歳代が全体の44%を占めており、若者が多いように言われているが、実際は年輩者の努力によって海岸が清掃されている。また、参加者の4分の1が公務員であり、ボランティア活動の主旨から言えば、公務員ばかりではなく、いろいろな所属の参加者が集まることが望ましいが、現状は呼びかけ側の公務員の参加が多い。また、清掃活動に参加する単位としては、職場と町内会がそれぞれ4分の1ずつで、あとは学校や家族単位の参加であった。」と報告している。

通常、多くの海岸愛護運動の活動として、海岸清掃活動が主な内容として行われている。「クリーン・ビーチいしかわ」の場合も同様に、身近な環境対応策として継続活動を行ってきている。これらの活動へ幅広い年齢層の人々が様々な経緯で参加している。その参加した人々の大部分は海を愛し、海と海岸の環境保全のために自主的なボランティア活動として参加したことは勿論言うまでもない。しかし、参加までの経緯として、職場、町内会等の動員による参加の実態も僅かであるが認められた。

今回、「クリーン・ビーチいしかわ」がスタートして8年目を迎え、当時小学生であった子どもたちも、「学生」と呼ばれる年齢に成長し、次の社会の担い手となり、親になる存在として期待される。昨今、わが国では多くの地域社会や学校等において、様々な奉仕活動が行われて来ているが、大学、各種学校等に多く在籍する18歳以降のエネルギーで自分の意思で行動しやすい立場にある人々の自主的なボランティア活動への参加は、学童や中高年の人々と比べ割合少ないのが現状である。特に教育的な見地からも、より多くの学生等の若年層の参加が望まれている。

今回の「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦2001」は、学生たちに自然の中で実際に海と海岸の環境保全の重要性を理解・実践してもらい、加えて若い感性でボランティア活動を通して「生きる力」を養成し、そのエネルギーを社会に役立てるために企画された。企画・運営に際して金沢星稜大学（旧大学名：金沢経済大学）池田研究室の学生が活動および活動サポートの中心として関わった。

学生たちがボランティア活動に参加する動機として、「他の困っている人々を助きたい」という気持ちや「よりよい社会を築きたい」という思い以外に、「何か新しく楽しい体験をしたい」、「他の新しい人たちと出会いたい」という動機をあげる人が少なくない。今回、極力動員による活動への参加ではなく、様々な人々、特に大学、各種学校等の学生たちを中心に自主的な参加を呼びかけて実施された。具体的には石川県内の各大学・各種学校の学生係等への直接案内、エフエム石川ラジオでのオンエア、新聞等への掲載での案内であった。

##### 4.2. 活動の概要

「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦2001」の活動概要は以下のとおりである。

###### (1) 目的

海、そしてボランティア活動に関心のある学生たちおよび学生以外の人々に海岸清掃への参加を呼びかけ、海と親しみながら、海岸環境、自然について意識を深め、加えて学生のボランティア活動や社会との関わり、より充実した学生生活の社会的活動への手掛かりとし、また、学生同士、学生と社会人の交流を図り、さらに学生の社会活動ネットワーク構築を図ることを目的としている。

###### (2) 実施内容

- ① 日時：平成13年10月7日（日）、8：00～11：00
- ② 活動場所：松任C.C.Z海岸（石川県松任市徳光）
- ③ 参加者：この活動に賛同する主として石川県内の大学・短期大学・専門学校等の学生および一般の人々
- ④ 内容（以下のプロジェクトⅠ～Ⅲに示す。）

###### プロジェクトⅠ「海岸清掃」（午前8：00～9：00）

「浜辺のごみの回収マニュアル」を参考に参加者が海岸清掃活動を行った。特に今回、海岸ゴミの回収については、



写真1. 海岸清掃活動

「効率的な清掃方法（金沢工業大学敷田麻実教授が提唱）」を実践し、清掃活動は1チーム5名を基本とし、4名は清掃を行い、1名を回収ごみの記録係とした。また、回収は区域（4区域）を決めて行い、分別しながらの回収とした（現地石川県松任市の分別方法に準じた）。なお、危険物等の回収にあたっては、特別チームを編成した。プロジェクトI「海岸清掃活動」の活動風景を写真1に示した。

プロジェクトII「海について語る」（午前9：30～10：00）

『海からの贈りもの』というテーマで、佐野 修（いしかわ動物園 第2飼育課長）の講演を実施した。海の漂流物やごみと生き物との関係について理解を深め、海および海岸における自然環境の保全の重要性が示された。

プロジェクトII「海について語る」の活動風景を写真2に示した。



写真2. 語り合い（『海からの贈りもの』）

プロジェクトIII「海の安全にチャレンジ」（午前10：00～10：45）

プロジェクトIII「海の安全を考える」の活動風景を写真3に示した。海および海岸の環境保全だけでなく、人々



写真3. 水上安全法講習（『海の安全を考える』）

が海と楽しみ、海を利用するうえでの安全について、日本赤十字社水上安全法の講習を実施し、参加者に体験してもらった。筆者（日本赤十字社水上安全法指導員）が講師を担当した。

なお、本活動の主催：クリーン・ビーチいしかわ実行委員会、協力：松任市、金沢星稜大学池田研究室、金沢工業大学敷田研究室であった。

また、参加者全員に対して海岸清掃活動、ボランティア活動や社会的活動に関する実態・意識等を内容とするアンケート調査を実施した。本研究において以下の項目で紹介する。

4.3. 活動参加者の調査より

参加した約120名の人々を対象に活動に関する実態・意識等を内容とするアンケート調査を実施した。調査方法は、無記名質問用紙法であった（回収数：83名、回収率：約70%）。なお、本研究では、調査内容のうち、今回特に活動の効果およびボランティアに関連する項目を中心に検討を試みた。

4.3.1. 参加者の年齢、性別

この活動への参加者の男女比は、男性57.8%、女性41.0%、未回答1.2%であった。年齢については、18歳～73歳までの回答者がおり、多い年齢として19歳32.5%、20歳19.3%、21歳10.8%、22歳8.4%、18歳7.2%であった。活動参加者の構成を図1に示した。その内訳として大学生55.4%、短大生12.0%、専門学校生8.4%、大学院生7.2%であり、社会人も16.9%という結果であった。やはり、「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦」ということで学生が80%以上を占めていた。

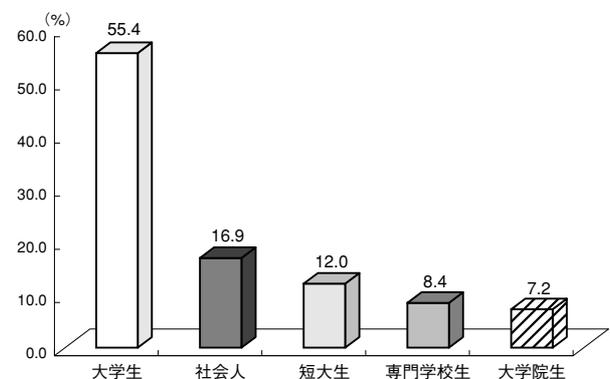


図1. 活動参加者の構成

今回の「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦2001」は、その対象が「活動に賛同する主として石川県内の大学・短

期大学・専門学校等の学生及び一般の人々」であり、学生間の交流は勿論ではあるが、決して学生のみを対象としているものではなく、地域の様々な人々と学生たちが交流できる機会を持つことも期待されていた。しかし、学生以外の参加者が比較的少なく、この点で本活動の提示方法に関して、今後の工夫が必要であると考えられる。

また、「どこから参加されましたか？」という問いに対して、実施場所に隣接している金沢市 53.0 %、小松市・能美郡 15.7 % であり、実施場所の松任市・美川町・鶴来町・野々市町近郊は 12.0 % であった。また、会場までの到達時間についても、30分未満 39.8 %、30分～1時間未満 50.6 %、1時間以上 9.6 % と、1時間以内が 90.4 % を占めていた。やはり活動の場所が海岸ということもあり、実施場所近郊からの参加者が大半を占める結果であった。ただ、河北郡 4.8 %、七尾市・鹿島郡 3.6 %、珠洲市・珠洲郡 1.2 %、そして隣県の富山県 7.2 %、福井県 1.2 % と実施場所近郊以外からの参加も合計 18 % であり、これらの人々の参加をきっかけに、本活動を実施場所のみならず、全県的に拡大して行くことが望まれる。

#### 4.3.2. 交通手段

「会場までの主な交通手段は何ですか？」という問いに対して、自家用車 69.9 %、他の人による送迎 26.5 %、バイク・自転車 1.2 %、徒歩 0 % であり、自動車を利用して現地へ来た人が 96.4 % と大部分を占めていた。今回、調査は行っていないが、自動車利用参加者の同乗率を調査し、出来るだけ同乗して来ることを推奨して行かなければならない。

#### 4.3.3. 活動参加への経緯

「これまで海岸清掃活動に参加したことがありますか？」という問いでは、「以前に参加したことがある」 63.9 %、「今回は初めて」 36.1 % であった。

「この活動について、どのようにして知りましたか？」という問いに対して、「他の人から聞いて」 45.8 %、「ポスター等の案内を見て」 16.9 %、「その他」 36.1 % であり、「ラジオを聴いて」と「たまたま会場に来て」がどちらも 0 % であった。また、活動の主旨・内容等についての事前の理解については、「知っていた」 55.4 %、「少し知っていた」 27.7 % であり、「あまり知らなかった」、「知らなかった」がそれぞれ 6.0 % であった。このように、参加者の 83.1 % は活動の主旨・内容等について事前に理解しており、参加者のうち約半数が他の人からのくちこみにより活動について知るに至っている。ただし、「その他」と答えた人が 36.1 % にもものぼり、その内容について、今回の調査では把握することが出来なかった。また、「ラジオを聴

いて」との回答も 0 % であり、予想に反して、参加者とラジオ広告との関連が低いことが示唆される結果となった。

#### 4.3.3. 活動参加へのきっかけおよび目的

参加者の活動へのきっかけを図2に示した。活動に参加したきっかけについては、「自分自身が参加したいと思ったから」 37.3 %、「他の人に勧められたから」 13.3 %、「職務上」 10.8 %、「何となく」 9.6 %、「友達に誘われたから」 8.4 % であり、自主的参加が最も多かった。また、「職務上」と回答したのは社会人であり、社会人参加者のうち約6割の参加のきっかけが職務上であり、社会人の参加の在り方に関しての今後の課題の1つと言える。

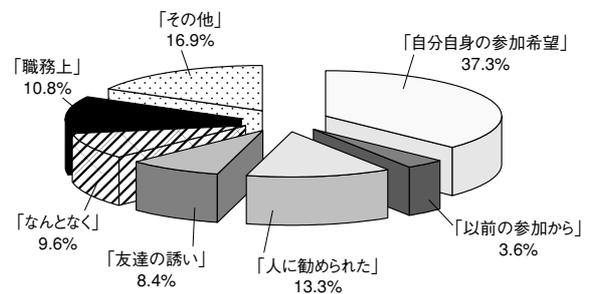


図2. 活動参加へのきっかけ

また、活動参加への目的について図3に示した。「ボランティア活動を行うため」 49.4 %、「海を綺麗にしたい」 28.9 %、「楽しいことをやりたい」 7.2 %、「今までやったことがないことにチャレンジしたい」 4.8 %、「自然に触れたい」、「友達の輪を広げたい」がそれぞれ 1.2 % であった。今回の参加者に関して、かなり海岸清掃活動の主旨に合致した目的を持った人たちが参加したものと言える。

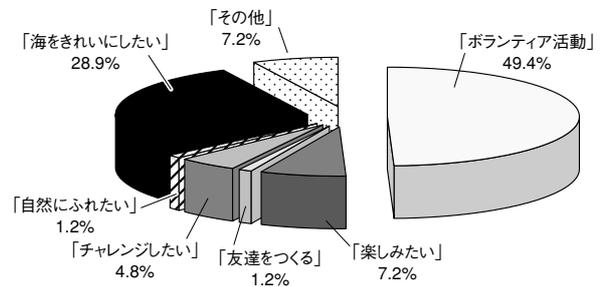


図3. 活動への参加目的

また、「自然の中で活動することが好きですか？」という問いに対して、「大好き」 51.8 %、「好き」 38.6 %、「どちらとも言えない」 9.6 %、「あまり好きではない」、「嫌い」が 0 %、「あなたは海が好きですか？」という問いに対しても、「大好き」 47.0 %、「好き」 47.0 %、「どちらとも言

えない」3.6%、「あまり好きではない」0%、「嫌い」2.4%であり、参加者の殆どが自然・海が好きな人たちであったと言える。

4.3.4. 活動に参加して

活動に参加しての「自然」・「海岸清掃」・「自分自身」に対する認識の変化の有無について、それぞれ図4-a-cに示した。

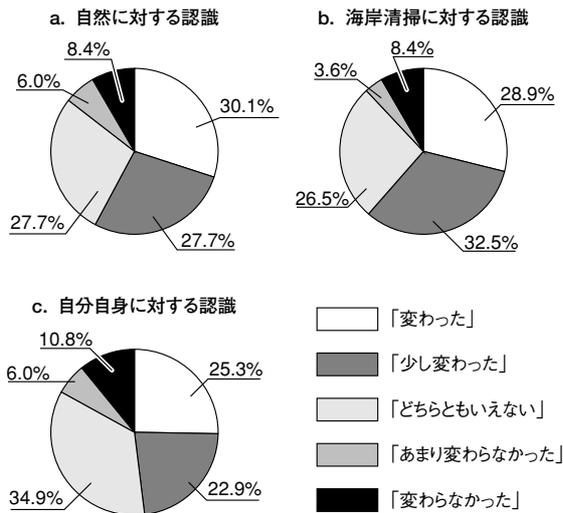


図4. 活動に参加しての認識の変化

「活動に参加して自然に対する認識が変わりましたか?」という問いに対して、「変った」30.1%、「少し変った」27.7%、「どちらとも言えない」27.7%、「あまり変わらなかった」6.0%、「変わらなかった」8.4%であった。また、「活動に参加して海岸清掃に対する認識が変わりましたか?」という問いでは、「変った」28.9%、「少し変った」32.5%、「どちらとも言えない」26.5%、「あまり変わらなかった」3.6%、「変わらなかった」8.4%であった。同様に、「活動に参加して自分自身に対する認識が変わりましたか?」という問いに対して、「変った」25.3%、「少し変った」22.9%、「どちらとも言えない」34.9%、「あまり変わらなかった」6.0%、「変わらなかった」10.8%であった。今回の活動に参加して、「自然」、「海岸清掃」に対して約60%の参加者が、「自分自身」に対してはほぼ半数が「認識が変わった」或いは「少し変った」と答えており、何らかのインパクトがあったものと思われる。残念ながら、どのような認識の変化があったのかは、今回の調査では明らかにすることが出来なかった。今後のより一層の検討が必要な項目と思われる。

4.3.4. 野外活動・ボランティア活動について

野外活動の重要性について、図5-aに示した。「人にとって野外活動は重要だと思いますか?」という問いに対して、「強く思う」55.4%、「思う」37.3%、「どちらとも言えない」4.8%、「あまり思わない」1.2%、「思わない」1.2%であった。ボランティア活動の必要性についても図5-bに示した。「これからの時代、ボランティア活動の必要性が増加すると思いますか?」という問いに対して、「強く思う」47.0%、「思う」41.0%、「どちらとも言えない」8.4%、「あまり思わない」0.0%、「思わない」3.6%であった。

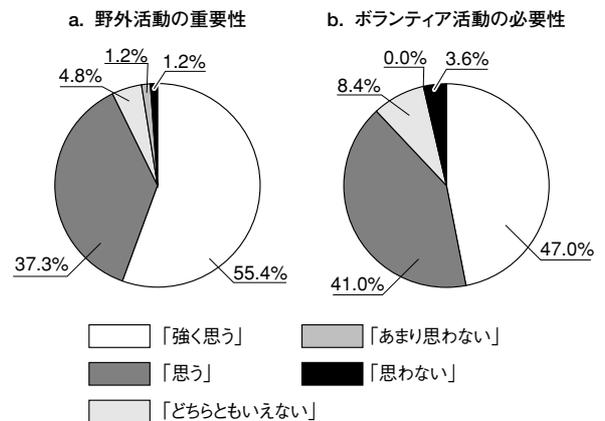


図5. 野外活動の重要性およびボランティア活動の必要性

これに対して参加者自身の野外活動・ボランティア活動についての経験度については、野外活動に関する経験が「豊富」14.5%、「少し」22.9%、「どちらとも言えない」28.9%、「あまり豊富ではない」26.5%、「豊富ではない」7.2%であり(図6)、ボランティア活動に関する経験が「豊富」13.3%、「少し」25.3%、「どちらとも言えない」26.5%、「あまり豊富ではない」26.5%、「豊富ではない」8.4%であった(図7)。

また、「学生にとって、このような活動は必要だと思いますか?」という問いに対して、「強く思う」47.0%、「思う」44.6%、「どちらとも言えない」、「あまり思わない」、

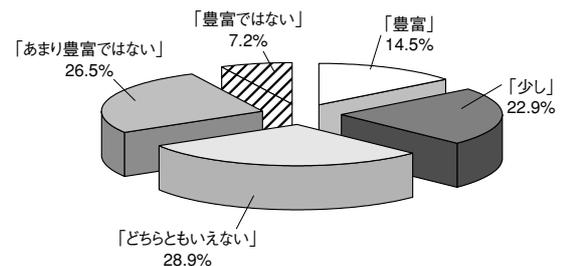


図6. 野外活動の経験

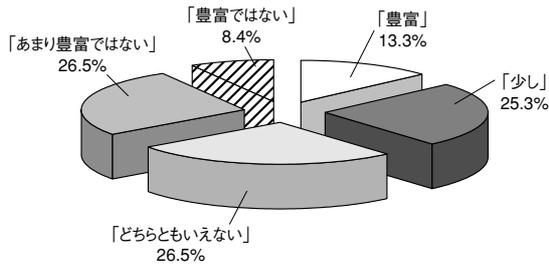


図7. ボランティア活動の経験

「思わない」がそれぞれ6.0%、12%、12%であった。このように、多くの参加者が今回のような活動の必要性・重要性について認識していることが伺える。しかし、参加者自身の野外活動・ボランティア活動についての経験度については、まだまだ十分とは言えず、この点に関して、より多くの野外活動・ボランティア活動への参加が望まれる。

#### 4.3.5. 活動に対する満足度・継続性

この活動に参加しての満足度を図8に示した。「この活動に参加して、全体としてあなたの満足度はどれくらいですか？」という問いに対し「とても満足」20.0%、「満足」50.6%、「どちらとも言えない」、「あまり満足ではない」、「不満足」がそれぞれ18.1%、7.2%、3.6%であった。今回の活動は、参加者にとって好意的なものであり、その目的をほぼ達成出来たものと推測される。

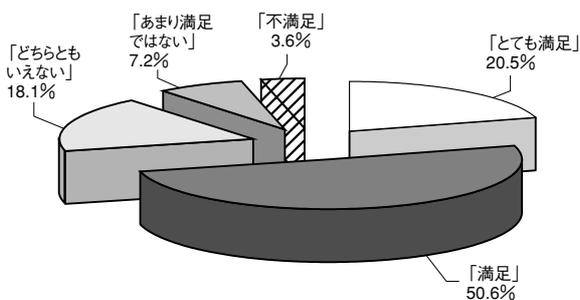


図8. 活動に対する満足度

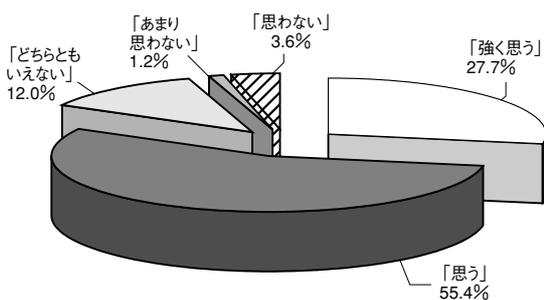


図9. 活動への継続性

また、活動の継続性について、図9に示した。「今後、このような活動にまた参加したいですか？」という問いに対して、「強く思う」27.7%、「思う」55.4%、「どちらとも言えない」、「あまり思わない」、「思わない」がそれぞれ12.0%、1.2%、3.6%という回答結果であり、8割以上の参加者が今後の活動への継続参加を望んでいる。

#### 4.4. 活動参加者の声

##### 4.4.1. 参加した学生からの一言

今回の活動に参加した学生の中から、その感想の一例を紹介する。

“パッと見た目には綺麗に見える海岸も実際に清掃を始めると細かいごみや隠れた場所にごみが沢山ありました。大きなごみを2,3人で運ぶ姿や友だち同士で話をしながら、楽しそうにごみを拾う姿もありました。普段、気付かぬうちに沢山のごみを出して汚していたことにガッカリしました。それを自分たちの手で清掃して綺麗にして行くことは、とても気持ちが良いものだと思います。自分たちでも何か社会にとって出来ることがあるということに気づきました。今後、ごみは増えて欲しくはありませんが、この学生クリーン・ビーチ活動をより多くの人々に知ってもらい、また、様々な人たちと交流を持って新鮮な気持ちで海岸清掃を行って行きたいと思います。参加して良かったです。”（金沢星稜大学 経済学部 4年 女性 Oさん）

##### 4.4.2. 参加した社会人からの一言

今回の活動に参加した社会人の中から、その感想の一例を紹介する。

“当日の朝は、はたしてどれくらいの学生たちが集まるのか半信半疑でした。なぜなら前夜繁華街での若者たちのにぎわいから推して、正直言ってあまり期待していませんでした。しかし、120人の参加とは驚きであり、また、集めたごみをいやな顔を一つせず分類している姿に感動しました。若者たちが海岸に立って自分の目で汚染の様子を知ることだけでも、十分意義があることだと思います。「今の若者は」などと言われているが、そんなに悲観する必要はありません。彼らを信頼すれば必ず、しっかりとやってくれるだろう。活動に一生懸命参加している若者たちを見て、そう確信しました。”（金沢市在住 男性 Uさん）

##### 4.4.3. 主催者側からの一言

今回の活動を主催者側から、その感想の一例を紹介する。

“多様化の時代、まず、集団作業するまでに集まってもらえるものだろうか。無駄な呼びかけではないのか。—そんな懸念に駆られていた。

遊びにバイト、いろいろと忙しい学生さんのことだ。まして奉仕作業、あまり楽しいことではない。第1回の「クリーン・ビーチいしかわ」の活動に参加した子どもたちが8年を経て、確かに大学生になっている年頃ではある。だから「学生版」クリーン・ビーチを、というのは企画としてまことに的を得たものと言ってよい。だが、問題は時代である。価値観の大きく変わったこの8年、その間に小学生から中学、高校、大学生へと打算と妥協もあっただろう現実のなかで成長した若者たちが、果たして海辺のごみ拾いなんぞに目を向けてくれるものか――。

当日、その懸念は払拭された。もぞもぞしながらではあるが、つまりきびきびしてはいないが、ごみ袋を手に分担された海岸に散っていく。それぞれに真剣である。遠方からきた学生もいる。午後にバイトを控えた学生もいる。だから真剣なのかもしれないが、忙しいなかにボランティアの時を見つけ集中する、今風のそんな若さが光っていた。「自主性に任せる。動員はかえって不必要」という池田先生（本活動アドバイザー）の姿勢は、学生を信頼する自信に裏打ちされていて、たとえ参加の数は多くなくとも萌芽を感じさせるに十分な「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦」の初日であった。”（クリーン・ビーチいしかわ実行委員会事務局 男性Iさん）

以上のように、感想文からみても参加した学生の環境保全、ボランティア活動参加への積極性を窺うことが出来る。また、参加した社会人や主催者側からは、環境保全、ボランティア活動参加への積極性は勿論、学生などの若者たちへの再認識と期待がかけられていることが察せられる。

## 5. 今後の活動継続への期待

### 5.1. 活動継続への期待

今日、環境や教育の視点から自然に対する人々の意識がより高まっている。次世代を担う子どもたちにとって、豊かな心を育み、「生きる力」を養うためには自然体験が非常に効果的であり、欠かすことが出来ない活動である。そのためには間もなく親になり、次の社会を担って行くべき年齢層である学生等の若者たちを育てることが重要である。海岸清掃活動、特に今回実施された「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦 2001」の活動は、海岸という自然環境下においてボランティア活動をしながら自然体験をも経験することが出来る1つの機会であり、今回の調査の結果からも学生たちにとって、この活動が野外活動、ボランティア活動等の参加へのきっかけづくりとしても効果的であり、地域の人々にとってもその期待が大きいものと推測される。

### 5.2. 活動支援の必要性

人々が安全で効果的に野外活動を経験するためには、環境の整備・充実、プログラムの検討・開発、指導者の確保・養成、安全確保、安全教育、行政側の支援等、様々な要素が必要不可欠である。特に今回実施された海岸清掃ボランティア活動のような営利目的でなく、運営のための予算が限られた施設・組織が自主的に行う活動等においては、その運営のための予算の不足、人員不足等により、実際の運営・サポート場面において、量的・質的に限界があり、十分な活動の機会を人々に提供することが規制される場合も考えられる。

海岸清掃活動においては、舞台が野外の自然環境下のため、運営における様々な配慮が必要であり、特に学生たちを対象とする場合、教育的側面のみならず、安全面についても細心の注意を払わなければならない、多くの様々な知識・技術そして経験を持ったサポートスタッフの確保が必要となる。しかし活動へ参加やサポート依頼に関し、ボランティアの本来の特性上、動員を掛けて参加を促したり、ましてや強制的に集めることはすべきではない。学校・家庭・地域社会・行政側は、相互に連携してこのような活動への機会を具体的かつ積極的に与えて行かなければならない。

また、活動への参加者にとってより楽しく、効果的な活動を自主的に自然のかたちで経験することが出来るためには、プログラムを企画・検討そして実施して行く段階においても、主催者側だけではなく、その活動におけるサポートスタッフ、そして参加する様々な人々が何らかのかたちで積極的に関与出来る体制を確立して行かなければならない<sup>(18)</sup>。

今後、学生や社会人のボランティアへの期待が高まることが調査結果からも予想される。今回の活動には学生は勿論、様々な形で複数のサポーターが関わっており、今後学生たちがその独自の感性とエネルギーを発揮出来るようにするために企画・運営連絡会等をより一層充実させていくことに加えて、ボランティアの人たちが積極的に参加しやすい学校や職場における協力ネットワーク等の環境づくりを推進していかなければならない。

## 6. まとめ

次世代を担う青少年たちにとって、豊かな心を育み、「生きる力」を養うためには自然体験が非常に大きな効果をもたらし、欠かすことが出来ない活動である。

今回の調査の結果からも学生たちを中心とした参加者にとって、「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦 2001」の活動が、今後の彼らの活動促進への効果が見られたと考えられ、地域の人々にとってもその期待が大きいものと言え

よう。

各地域において様々な環境愛護運動が展開されており、それらの1つとして石川県においても「クリーン・ビーチいしかわ」の活動が実施され、県民に大きなインパクトを与えてきた。加えて今回、2001年10月に第1回の「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦2001」が実施され、特に学生たちによるボランティア活動、野外教育活動の一機会を発信できたものと言える。この活動に参加することにより“21世紀の環境を守っていくのは自分たちである”との自覚が芽生えたことが予想される。

ただし、今回の活動に関して、「“学生”クリーン・ビーチ」というように、その企画・準備・運営・実施において多くの学生が主体的に関わって来たことは事実ではあるが、中心的な役割を果たしたのは、少数の大学所属の学生たちに限られ、かつ活動における様々な場面においても主催者側組織、大学教員等社会人が多くその割合を占める結果であった。勿論、学生たち若者がその中心となる活動を目指し、加えて様々な年齢、職業、立場の人々との相互交流も同時に活動目的としていることから、今回の活動について成功失敗の是非について言及することは無意味ではあるが、「学生クリーン・ビーチいしかわ」の活動が今後、より多くの学生たち若者を中心に継続されることを期待したい。

今後の課題として、学校・家庭・地域社会の相互連携をより一層図れるような具体的方策を提示するために、行政側や地域社会の人々、そして実践している多くの個人・諸団体とのネットワークづくりを構築するため、これらの活動について、より詳細な調査・検討を継続して行かなければならない。

追記：なお今回の活動実践に際しクリーン・ビーチいしかわ実行委員会、会場となった松任市行政の関係者の方々をはじめ、活動サポートを行った金沢星稜大学池田研究室および金沢工業大学敷田研究室の学生たちの協力を得た。これに対し心から感謝の意を表する次第である。今後も学

生たちの社会的活動を期待して見守ってくれることを切望する。

「学生クリーン・ビーチいしかわ大作戦2001」の活動については、『クリーン・ビーチいしかわ2001活動報告』（クリーン・ビーチいしかわ実行委員会発行、2001年3月）においても報告している。

## 参考・引用文献

- (1) 岡村泰斗, 飯田 稔, 橘 直隆, 関 智子「キャンプにおける環境教育・冒険教育プログラムが参加者の自然に対する態度に及ぼす効果の比較研究」野外教育研究 第3巻 第2号 1-12 (2000)
- (2) 叶 俊文, 平田祐一, 中野友博「自然体験学習が児童・生徒の心理的側面に及ぼす影響」野外教育研究 第4巻 第1号 p.39-50 (2000)
- (3) 文部省・青少年の野外教育推進全国会議実行委員会「野外教育全国フォーラム報告書」(1997)
- (4) 財団法人厚生統計協会, 「国民衛生の動向・厚生指標」臨時増刊・第48巻 第9号・通巻752号 (2001)
- (5) 河合雅雄『子どもと自然』岩波新書 (1998)
- (6) 生涯学習審議会, 「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ(答申)」(1999)
- (7) 文部省『文部時報 第1466号』(1998)
- (8) 日本野外教育学会『野外教育活動—その考え方と実際—』
- (9) 文部省『文部時報 第1489号』(2000)
- (10) 文部省『ひろがるボランティア活動』(1997)
- (11) 総務庁青年対策本部『青少年とボランティア活動—「青少年のボランティア活動に関する調査」報告書—』(1994)
- (12) 厚生省『厚生白書』(2000)
- (13) 社団法人日本青年奉仕協会『ボランティア白書2001』(2001)
- (14) 内海成治, 入江幸男, 水野義之『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社 (1999)
- (15) クリーン・ビーチいしかわ実行委員会, 「クリーン・ビーチいしかわ2001活動報告」(2002)
- (16) クリーン・ビーチいしかわ実行委員会, 「クリーン・ビーチいしかわ2000活動報告」(2001)
- (17) クリーン・ビーチいしかわ実行委員会, 「クリーン・ビーチいしかわ1999活動報告」(2000)
- (18) 財団法人内外学生センター『大学とボランティア』(2001)